



2019年度

# 北方領土中学生作文コンテスト 入賞作品集



第18回（2019年度）「北方領土の日」ポスターコンテスト  
最優秀賞（こどもの部 中学生） 北原 星奈さん（苫小牧市）の作品

北海道

総務部北方領土対策本部北方領土対策課

## はじめに

北方領土の島々が不法に占拠されてから、74年もの長い年月が過ぎましたが、未だに返還は実現していません。

この間、北方領土に住んでいた元島民の方々のうち、半数以上の方がお亡くなりになり、平均年齢も84歳を越え、一日も早い北方領土問題の解決が望まれています。

北方領土返還に向けた国の外交交渉を支え、後押しするのは、国民の北方領土返還を求める強い思いです。

これまで、北方領土返還要求運動は、元島民の方々が中心となって行ってきましたが、北方領土問題は、領土という国の主権に関わる戦後我が国に残された重要課題であり、元島民の方々だけの問題ではありません。国民全体の問題として、北方領土返還要求運動を次の世代、若い世代へと引き継いでいくことが必要です。

そのため、道では、北方領土返還要求運動の次代を担う中学生に、北方領土についての関心を高めていただくことを目的として、平成28年度から作文コンテストを実施しています。

この度、令和元年度（2019年度）のコンテストの入賞作品を文集としてまとめました。

北海道内の中学生たちが、北方領土問題について授業で学んだことや自分で調べたこと、元島民の方から話を聞いたことなど、様々な方法で、北方領土問題についての理解を深めた上で、北方領土問題の解決に向け、日本はどうすべきなのか、そして自分たちには何ができて、すべきなのか、真剣に考えていることが伝わる作品です。

ぜひ、同世代の中学生はもちろん、より多くの方に御覧いただき、北方領土問題について考えるきっかけとしていただきたいと考えております。

最後に、事業の実施にあたり御協力いただきました皆様に、お礼申し上げます。

令和2年3月

北海道総務部北方領土対策本部

## 目 次

○ 2019年度北方領土中学生作文コンテスト入賞作品	1
1 入賞者一覧（最優秀賞、優秀賞、佳作、奨励賞）	2
2 入賞作品	
① 最優秀賞 1編	3
② 優秀賞 4編	4
③ 佳作 5編	8
④ 奨励賞 11編	13
○ その他（実施要綱等）	25
1 2019年度北方領土中学生作文コンテスト実施要綱	26
2 2019年度北方領土中学生作文コンテスト選考要領	27
3 2019年度北方領土中学生作文コンテスト実施結果	28

2019年度  
北方領土中学生作文コンテスト入賞作品

## 2019年度北方領土中学生作文コンテスト 入賞作品

賞	市町村名	学 校 名	学年	氏 名	題 名
最優秀賞	中標津町	中標津町立計根別学園	9	こんどう かりん 近藤 夏林	返還を世界平和の象徴に
優秀賞	札幌市	北海道教育大学附属札幌中学校	2	にかいどう さくらこ 二階堂 桜子	ニエットからズドラーストビチェへ
優秀賞	網走市	網走市立呼人中学校	2	てらさき ゆい 寺崎 結	北方領土問題について
優秀賞	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	みなぞえ りこ 皆添 莉子	北方領土についての根本的な問題
優秀賞	根室市	根室市立歯舞小中学校	3	なかむら そら 中村 そら	これからの北方領土
佳作	七飯町	七飯町立七飯中学校	3	しょうじ なぎ 庄司 凧	日本とロシアに必要なもの
佳作	鹿部町	鹿部町立鹿部中学校	2	かわむら きゅう 川村 球宇	繋がる未来
佳作	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	いわき ひな 岩城 妃奈	お互いに寄りそって
佳作	根室市	根室市立光洋中学校	1	こんどう ひめか 近藤 妃香	北方領土返還に込める想い
佳作	根室市	根室市立歯舞小中学校	3	くわの こはる 桑野 心晴	北方領土問題について思ったこと
奨励賞	札幌市	札幌市立藤野中学校	2	みやうち かんた 宮谷内 勘太	北方領土、自由訪問の今後
奨励賞	登別市	登別市立緑陽中学校	2	さかいや かいと 堺谷 海斗	強き心と強き意思で前へ！
奨励賞	登別市	登別市立緑陽中学校	2	なかむら とき 中村 斗希	日本に欠かせない北方領土
奨励賞	登別市	登別市立緑陽中学校	2	ふかや いちご 深谷 いちご	平和的解決、人々の幸せ
奨励賞	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	しみず ゆうか 清水 優花	どちらが悪い。どちらも悪くない。
奨励賞	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	なりた よしあき 成田 善昭	「共存」という選択肢
奨励賞	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	たかはし ひなこ 高橋 聖奈子	互いに分かり合う
奨励賞	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校	2	やまざき ひかる 山崎 光	これからの北方領土
奨励賞	根室市	根室市立歯舞小中学校	1	かんば りこ 干場 リコ	北方領土を返してほしいという思い
奨励賞	根室市	根室市立歯舞小中学校	3	しみず そら 清水 空	北方領土問題について
奨励賞	根室市	根室市立歯舞小中学校	2	つしま あかり 津嶋 明里	北方領土

「返還を世界平和の象徴に」

中標津町立計根別学園  
9年 近藤 夏林

「択捉島へ行ってみませんか？」

一枚のお便りが学校から配布されました。これが私の北方領土への考えを変えてくれたのです。もともと、北方領土には大きな国の問題として興味がありました。

「こんな近くに住んでいるのに、北方領土を知らないなんて恥ずかしい。」

と思い、実際に択捉島に行ってきました。行く前は、「ロシアは不法に日本の領土を占領した。」ということしか知らなかったため、ロシアに対して、怖いという印象を持っていました。ですが、実際に行ってみると、島に住んでいるロシア人は、笑顔で

「友人。」

と、迎えてくれました。私は、ロシア人に対しての印象が「ガラッ」と変わりました。択捉島へ訪問している時、私はふと思いました。

「以前、島に住んでいた日本人と、現在住んでいるロシア人が共有できる場にしてはどうだろうか。」

と。そうすれば、日本人にとってもロシア人にとっても、納得できるかもしれないと思いました。家に帰り、早速その話を家族にしてみると、父が言いました。

「それは違うんじゃない？」

私は驚きました。

「ロシアは、日本が戦争で苦しんでいる時に、日本との中立条約を結んでいるのにも関わらず、攻めてきたんだよ。」

という父からの話を聞き、ハッと気づきました。

「やっぱり、返還を求めるべきだ。」

と思い、日本が返還を求めている理由も、よくわかりました。

では、どうすれば日本に北方領土が返還されるのでしょうか。そもそも私のように、北方領土について正しく理解していない人がたくさんいるのではないだろうかと思い、私なりに考えた結果、三つの案が浮かびました。

一つ目は、学校で必ず北方領土について正しく理解してもらうための授業をすることです。例えば、社会の歴史の授業や道徳の授業などで取り入れられると思います。これは、小学生や中学生などの学生に正しい歴史を知ってもらうために効果的だと考えました。

二つ目は、根室市にある二・ホ・ロを全国に設立することです。北方領土について、楽しく、気軽にふれ合える二・ホ・ロを全国に設立することで、興味を持ってもらえると思いました。

三つ目は、択捉島などの北方領土の印象的な写真をSNSで公開することです。実際に北方領土へ行った人が、ロシア人と交流している様子や、島にある建物などを公開することによって、現在の北方領土の様子を知ることができると思います。

このようにして、正しい歴史や今の現状を知っている仲間を増やしていきたいです。そして、それらの力を集めて、ロシアの大統領に北方領土を返してほしいという日本の思いを伝えたいです。私たちのような若者が直接訴えることによって、「返してほしい！」という思いが伝わるかもしれません。

「ここまでするのか。」と心打たれるかもしれません。また、元島民の方達の高齢化が進み、返還への思いを伝える人が少なくなっています。ですので、私たち若者がその思いを引き継ぐべきだと思います。そして、もしこの問題が解決できたならば、世界平和の象徴になると思います。

「武力を用いなくても国の問題は解決できるのだ。」

ということの世界に発信できると思います。七十年かかってしまいましたが、話し合いで解決しようとする日本は素晴らしいと思います。そんな国に生まれたことを誇りに思い、これからも北方領土返還運動に関わっていこうと思います。

【優秀賞】

「ニエットからズドラーストビチェへ」

北海道教育大学附属札幌中学校

2年 二階堂 桜子

イポン、ソルダート、ニエット。これは私が祖母から聞いたロシア語です。

祖母は、国後島の元島民です。一九四五年八月の終わり、古釜布の湾にロシア兵が上陸しました。そして九月に多くの島民と一緒に、祖母は家を離れなくてはならなくなりました。

その約一月の間、ロシア兵は島を巡回し、日本兵が隠れていないか探して歩いたそうです。生きるために、八歳の祖母が覚えたロシア語が、イポン（日本）、ソルダート（兵士）、ニエット（NO、いえ）でした。ロシア兵から何か聞かれることがあっても、ニエットと答えるよう両親から教えられたそうです。

実際にロシア兵と話す機会はなかったそうですが、70年以上経っても祖母は忘れることはありませんでした。

島を追われた祖母はその後、北海道内の親戚の家に身を寄せることになります。そこでは、島での豊かな暮らしが一変し、兄弟も離ればなれになり、悔しい思いをたくさんしたと教えてくれました。島に帰りたいという願いが叶うことはなくても、前を見つめて黙々と生きてきたのだと思います。

私は以前、他の元島民の方の講話を聞いたことがあります。択捉島出身の方のお話によると、島は自然が豊かで、ラッコやエトピリカのような珍しい動物がいたり、子供たちがたくさんいて賑わっていたということでした。その男性も、七歳で突然島を追われました。

「島を返せ！」大きな声でその方が叫ぶ声を聞きました。生の声を聞いて、私は胸が揺さぶられました。島を返せと叫んでいるのは、目の前にいる高齢者の方ではあるけれど、本当は七歳の子供の心の叫びなのだ気付きました。祖母のようにずっと辛抱して生きてきて、大人になってやっと大きな声で叫ぶことができるようになったのではないかと思います。

元島民の方のお話を他の人にも聞いてもらいたいと思います。そうすれば、決して北方領土を力づくで解決することはできないとわかるはずです。無理やり島を追われる人を再び作ってはいけません。

北方領土問題は七十四年経っても解決に至っていません。ビザなし交流や共同経済活動をしてきても、日ロ間にはまだ平和条約が締結されていないのです。両国の利益になるような条約を結び、早く国境線が引かれることを望みます。

祖母から聞いたロシア語は他にもあります。ズドラーストビチェ（こんにちは）、ダスビダーニャ（さようなら）です。この言葉を覚えて祖母や元島民の人々は、ロシア兵と交渉し平和的に解決しようとしたのでしょうか。祖母が生きてするために覚えた言葉を、今度は私が使ってみようと思います。ロシアの方との交流のために。叶うのであれば、日本に戻ってきた国後島の地で。

「北方領土問題について」

網走市立呼人中学校

2年 寺崎 結

私は八月二十八日に元島民の語り部の方からお話を聞きました。昔はどのような生活をしていたのか、占拠された時の様子、現在の生活はどのようなものかなど、教えていただきました。

北方四島は面積五千平方キロメートルで、歯舞群島では、面積が小さいながらもたくさんの方が生活していました。また、そこでは長さ5、6メートルの昆布を取って暮らしていました。他の島でも特に漁業が盛んで、漁を中心に生活していたそうです。戦争の間はひもじい生活をしていて、食べ物が自由に買えず毎日同じおかずで、それでも、わがままや不満は言えなかったそうです。そして戦争に勝ったロシアは不法に四島を占拠したそうです。無抵抗の人たちを銃で脅し、家を荒らされた、その時のことを長い年月がたった今でも忘れられないと話していました。

そんな毎日に耐えきれず、島を脱出する人もいたそうです。その後、兵隊が上陸し、島民の方は強制送還させられました。乗り込んだ船は貨物船で毎日パンと漬物を出されたそうです。船は不衛生で栄養失調で亡くなる方もいて、幼い赤ん坊ですら死んでしまえば海に捨てられてしまったそうです。

私はこの話をもっと多くの人へ語り継がれるべきだと思います。当時、島で暮らしていた自分の故郷を奪われ、その後、今現在も満足に島に行き来することもできていません。元島民の多くの方は悔しく悲しい思いを今もしています。最近、市のお祭りや行事などで北方領土返還に関する活動を目にします。そういった活動に参加していくことで、より北方領土への理解が深まっていくと思います。私たちの行動一つで少しでも状況が良くなるならば、それをしていくことが必要です。いつか北方領土が返還されることを願っています。

自分には関係ないことと思うのではなく、日本の領土が不法に占拠され、辛い思いを経験して、今、返還を目指して活動している人がいることを知ってほしいです。同じ日本の国民として、少しでもこのような意識を持つことが大きな力となるはずです。私自身も直接語り部の方から話を聞いて、昔の北方領土のことや現在の状況がよくわかり、理解を深めることができました。人から人へ語り継がれることでよりたくさんの人に。日本だけでなく、不法に占拠しているロシアにも、この事実を知ってほしいと思います。



## 【優秀賞】

### 「北方領土についての根本的な問題」

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 皆添 莉子

待ちに待った夏休み、社会科担当の先生からこの課題を出され、最初に私が思ったことと言えば、「え、北方領土のことなんて全然知らない。」だった。街では北方領土返還を望むデザインのバスが走り回り、北方領土関係なのかは知らないが、イメージキャラクターのエリカちゃんも必死に手を振って返還を求めている、その上毎年授業で触れるのに、なぜこんなことになっているのだろうか。私の勉強不足と言われればそれまでだが、同じような考えの人がわんさかいると知り、今更ながらまずいのではないかと思った。日ロ関係だとか、元島民の想いだとかそれ以前に、北方領土のことについて全く知らない人が多すぎる。どうすればこの状況を打破できるのか、考えてみることにした。

ところがこれが難しい。語り部の方に全道の学校に来てもらうのは不可能だし、授業でも触れている。バスも走っているし、エリカちゃんもいる。もうやれることは全てやっているのではないか。いや、それなら、既にやっていることに何かプラスすれば良い。そこで私が思いついたのが、授業の時、何かの映像を生徒に見せることだ。

例えば、アニメ映画である「ジョバンニの島」を、授業の中で生徒に見てもらい、感想も記述してもらう。私の学校ではこの方法で授業を受けた。映像を見るとテキストを読むより頭に入る。私も少しだけ、北方領土のことが見えた気がした。映像の併用と感想の記述は効果があると思う。

ではそこで得た知識を、どう広めるのか。こういうときこそ、インターネットを使うべきだ。インターネットには、一度拡散されるとあっという間に広まってしまう恐ろしいところもあるが、それは逆に考えれば、この問題のことを一気に拡散できるということにもなる。北方領土について得た知識を自分の中にとどめておくのではなく、積極的に発信していくと良いと思う。幸い、今は情報を発信できる手段が豊富にある。一人でも多くの人がこの問題のことを発信し、一人でも多くの人がそれを受け取ってくれば、この状況は良くなるのではないだろうか。

もちろん、ロシアとの関係がどうなるのかも重要だし、元島民の方がどんな想いを抱いているのかも忘れてはいけない。しかし、そもそも北方領土のことが全くわからないのは、根本的な問題だ。少しでもこの問題を正面から受け止めることができる人が増えることを私は切に願う。

【優秀賞】

「これからの北方領土」

根室市立歯舞小中学校

3年 中村 そら

私の住んでいる所からは北方領土が見えます。こんなにも近くにあって、日本固有の島なのに、行ったこともなければ、どんな所かも知りません。なぜなら、今から七十四年前にロシアに不法占拠されたため、簡単には行くことができないからです。

当時北方領土に住んでいた約一万七千人の島民は、島から追い出され、今はロシア人が住んでいます。

そして、私の曾祖母も元島民の一人です。

私が小学生の時、その時の話を聞いてみると曾祖母は、

「小さかったからあまり覚えていないけど、命からがら船で逃げたよ。怖かった。」

と教えてくれました。私はそれを聞いて、「故郷を奪われた元島民がかわいそう。島を早く返してくれればいいのに」程度にしか考えていませんでした。

しかし、学校での北方領土学習の一つとしてのビザなし交流で、北方領土に住んでいるロシア人の子供たちに会い、あることに気付きました。それは、彼らにとっても、今は北方領土が故郷になっているということです。北方領土が返還されることを、今の島民を追い出し、日本の領土にする、というふうを考えることは、本当の問題解決とは言えないと、その時思いました。

私には、両国が納得し、平和に繋がる解決策はわかりません。しかし、まず、現在制限されている行き来を自由にすることはできると思うのです。行き来の問題が解決すれば、漁業問題などの色々な問題にも進展があると思います。

ここで忘れてはならないのは、お互いの立場になって考えることです。私はこのことを、学校でのビザなし交流などを通して気付くことができました。両国が納得できる最善の策を見つけるためには、私たち国民が北方領土問題と向き合っていかなければならないのです。「自分には関係ない」という考えの人にも、これから生まれてくる世代にも、語り継いでいくのは私たちの役目です。

北方領土を「日本とロシアの不仲の象徴」ではなく「日本とロシアの友好の象徴」とすることができるといいように。そして曾祖母の故郷、水晶島に、曾祖母と共に訪れる日が早く来ますように。

【佳作】

## 「日本とロシアに必要なもの」

七飯町立七飯中学校

3年 庄司 凧

二月七日。この日は「北方領土の日」だ。この日を知らなかった僕が、北方領土に興味を持ったのは中学二年の時だった。雪の降る日に元島民二世の方からお話を伺った。故郷に帰ることができず、残してきたお墓にお参りすらできない切なさを知った。根室の海に浮かぶ北方領土の雪景色が見えたように感じた。

外務省のホームページを見ると「北方領土は日本固有の領土である」と書かれていた。アメリカもこのことを認めている。しかし、日本とロシアはいまだ、平和条約も結べていないために、日本とロシアとの間では国境が定められていない。

どうすれば良いのか考えたとき、「ジョバンニの島」の一場面が浮かんだ。大事なものは「共存」という言葉なのだと思う。共存することは、二つの国双方にとってメリットがある。日本側のメリットの一つは漁業の範囲が拡大することだ。資源を確保できることだと言い換えてもいいだろう。ロシア側のメリットは技術を日本から輸入できることだ。資源の生かし方を手に入れることができる。二つのメリットは一致している。二つの国の良さが発揮できて、貿易の拡大も望めるだろう。

そうすれば、日本とロシアの島民の方たちが救われる。ロシアに占領され尽くす前の一時、北方領土に訪れた「平等」な共存が再現される。純平とターニャの笑顔が現実になるのだ。

僕が住んでいるのは七飯町だ。七飯町は、「西洋農業発祥の地」と呼ばれる。イギリスから来たガルトネルという人物が、西洋種農作物の栽培を行ったことが、当町農業の契機となり、その後、日本各地へと西洋農業を広める礎を作ることになったからだ。

建造物も多く建てられ、さながら異国のような風景であると、当時の七飯を旅行したイギリス女性イザベラ・バートも日誌に記したその当時の七飯の写真を僕は何度も目にした。だから、二つの国の文化が一つの場所で共存する姿を僕ははっきりと想像することができる。それは、豊かさや笑顔に満ちた情景だ。

それを妨げるのは、両国の「不安」だ。技術を奪われるだけで終わるのではないかという不安と自分たちの住む場所がなくなってしまうかもしれないという不安。お互いに動けなくなっているのが今の状況だろう。だからこそ、日本国民とロシア国民全員が、自分たち自身の問題として北方領土問題について考えることが必要だ。お互いの国について理解し合ったとき、日本とロシアはとても強い協力関係を築くだろう。

二つの国の文化が結びついたことによる豊かさを証明した地、西洋農業発祥の地としての七飯に住む僕は、これからも「共存」を強く訴えたい。たくさんの人にその豊かさや必要性を伝えたい。どちらの国にも不満がない平等な地になったとき、北方領土は二つの国の架け橋となるのだ。

「繋がる未来」

鹿部町立鹿部中学校

2年 川村 球宇

昔、日本や世界中で戦争があったって本当ですか。今の僕たちはこんなに何不自由なく暮らしているのに。昔、日本の領土に住んでいたのに追い出され、故郷を奪われた人たちがいたっていうのは本当ですか。今の僕たちは安心して自分の住みたいところで生きられているのに。

「北方領土」とは、国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島の四つの島のことで、第二次世界大戦後、日本の領土だったのに、旧ソ連に無理やり奪われ、未だに返してもらえない場所。

正直、今までの僕は、学校で習ったその程度の知識しかなく、今回作文を書くにあたってネットで調べてみても、ただ難しい言葉で出来事が書かれた文ばかりでピンとくるものがなく、心に響いてきません。どうしても生の声が聞きたいと思いました。

そこで祖父に、誰か北方領土について詳しく教えてくれる人はいないかと相談したところ、知人に連絡してくれ、紹介してもらったのが、「北方領土復帰期成同盟」の方でした。その方にお会いし、北方領土が旧ソ連に奪われるまでは今まで一度も他国に侵略されることなく、日本人の手によって開拓された日本固有の領土であることをわかりやすく説明してくださいました。そして色々な資料もいただき、その中でも僕の心に一番響いたのが元島民の方たちの訴えでした。

そこには、その方たちの祖先が一つひとつ手で木を切る。根を掘る。草を取る。全部手仕事で、まさに血と汗を流して開拓した島を追い出され、故郷を失った死ぬほどの苦痛と無念の思いが生々しく書かれていました。僕はこれらを読んで、なぜ、人間は戦争という取り返しのつかない過ちをおかすのかと、とても憤りを感じました。

復帰期成同盟の方たちは、国対国の本当に難しい問題だから長く時間がかかるだろう。どこの国でも領土問題というものは、難しく根深いものだというお話をしてくださいました。そして、平和な暮らししか知らず、政治や領土問題に関心の薄い、僕を含む現代の若者たちに、このことを繋げていくためにも、復帰期成同盟の方たちはキャラバン隊をつくり、講演会、署名運動等の活動で各地を回っていらっしゃることを聞き、僕もそのキャラバン隊の出発式に参加させていただきました。

僕が一番感銘を受けたのが、日本政府や復帰期成同盟の方たちの、返還後も、北方領土に現在居住しているロシア国民と共存していくという考えです。昔、強制退去させられた日本人の島民と同じ悲劇をくり返してはならないという考え方に、僕も日本人として誇らしさを感じました。ロシア人も日本人も皆、同じ人間です。大切な家族や住む家、故郷を想う気持ちは誰でも一緒だと想います。

今回出会った方たち、先人たちが残してくれた大切な想いを無駄にせず、僕たち若い世代ができること、それを一人ひとりが真剣に考え行動することによって、幸せな未来に繋がると思うのです。

「お互いに寄りそって」

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 岩城 妃奈

「北方領土返還のためには戦争をしなければいけない。」

数ヶ月前にとある国会議員の方がこのような発言をしました。私はこのいわゆる「戦争発言」を聞いたとき、少なからず反感を抱きました。これは、元島民の方々を深く傷つけるものだと思います。

北海道、特に道東に住む私にとって、北方領土問題というのは他の地域に住む人たちと比べると、かなり身近に感じられるものです。だから、その議員の方にとっても、ことさら悪意があったわけではなく、解決の方法を見いだせず、いたずらに月日が過ぎているだけの現状を何とかしたいと思った故の発言だったのだと思います。私も、良い解決法を訊かれも、パツとは出てきません。それだけ私たちが思っているよりずっと困難なものなのだと思います。

もともと、北方領土は戦争によってソ連に占拠されました。しかし、一部のソ連の人々と日本人は友好的に過ごしていたそうです。それなら、戦争なんかしなくても北方領土の返還は可能なのではないかと思います。

そもそも、北方領土問題について、ロシア側と日本側、また国同士の関係と民間同士の関係では相違があるように思います。実際、返還を求める日本人は多く、署名などの活動も盛んです。ロシア側については、会談やビザなし交流に応じてくれています。民間レベルでは、友好的な関係を築けているのだから、まずはもっとお互いを知っていくことが大切だと思います。

私はこの間、北方領土返還要求の署名に参加しました。二ページにもわたって多くの人の名前が記されているのを見て、温かい気持ちになりました。「一人ひとりの意識」というのは大切だと思います。でもただ「活動に参加した」という自己満足にはなってはいけないと思います。ただ署名するだけでなく、意識して考えることが、活動を意味のあるものにし、ひいては北方領土返還に繋がるのではないのでしょうか。

戦争で奪われた領土は、戦争で奪い返すべきなのか。私は戦争をしなくても良いと思います。人はいつか分かり合えると思います。それに、武力で解決したとして、それでは、多くの犠牲者を出し、北方領土に住んでいたロシアの人々の居場所も奪うことになってしまいます。同じ出来事の繰り返しです。悲劇を繰り返さないためにも、地道にできることをしていくことが大切だと思います。

日本人とロシア人。今の交流をもっと深めて、日本とロシア、国対国が民間と同じように寄りそい合って歩んでいけるような未来、そんな日が来ることを、私は願っています。

【佳作】

「北方領土返還に込める想い」

根室市立光洋中学校

1年 近藤 妃香

「北方領土返還」という言葉は、私が幼い頃から何度も耳にしてきました。私には「北方領土が返ってきてほしい」という、強い気持ちがあります。

なぜなら、私の曾祖母が国後島出身だからです。家族は、曾祖母を含めて兄弟八人と両親の十人暮らしでした。

当時小学二年生だった曾祖母は、学校から帰ると、昆布の手伝いをしたり、すぐ近くの山にイチゴやフレップという果物を、兄弟や友達と採りに行って食べるのが、楽しい日常の一つだったそうです。そんな楽しい日々の中でも、学校では、いつ戦争になるかわからないという理由で、自分の身を守る訓練もしていました。

また、曾祖母の父が、家の近くに小さな防空壕を造ってくれました。この時に一番衝撃的だった曾祖母の父の言葉があります。それは、

「ロシア人が来て、いざという時は皆でこの中に入るんだぞ。ロシア人に殺されるくらいなら、皆ここで死のう」という言葉でした。

この時、曾祖母は、小さいながらも防空壕の中を見つめ、

「ここで死ぬかもしれない」と、覚悟したと聞きました。私は、そのことを聞いて、まだ幼いのにそんな大きな決断をしなければならなかったということに、胸が締めつけられる思いでした。

その後、日本が戦争に負け、ロシア人が国後島に何度もやってくるようになり、突然やってくるロシア人に殺されてしまう人もいました。そんなことが続いたある日、ロシア人は曾祖母の家にもやって来ました。曾祖母は「殺されるかもしれない」と覚悟しましたが、そのロシア人は、家の家具を持っていくかわりに、曾祖母の父にお金をくれました。家を荒らされると思っていた父は、驚き、ロシア人がくれたお金を、

「大事にするんだぞ」と、曾祖母に握り渡してくれました。その時もらったお金は今も大切に残っています。

私はこの話を聞いて、「ロシア人は悪い人ばかりではない。その中にはいい人だっている。日本人の命を大切に考えてくれるロシア人もいるんだな。」と思いました。

きっと曾祖母の父もそう思って、曾祖母にお金を託したのだと思います。

ですがやはり、頻繁に来るロシア人に恐れながらの生活は精神的にも苦しく、終戦から二か月が過ぎた頃、家族で根室へ逃げることにしました。

夜な夜な、小さな船に、曾祖母の家族のほかにもたくさんの人が乗り込み、海がしけて船が大きく揺れて、とても怖い思いをしたそうです。

当時は住み慣れた村を離れる淋しさなど、感じる余裕もない心境でした。

きっと私自身も同じ気持ちになると思います。とても悲しいです。同時に、もう二度と、このようなことが起きてはならないと、強く思いました。

現在曾祖母は八十二歳になりました。今でも当時のことを思うと、

「ずっと国後島に住んでいたかったな」と、楽しかった思い出がよみがえってくるようです。曾祖母に残された時間は、あまり長くありません。少しでも早く、北方領土返還が叶い、曾祖母と一緒に国後島へ行き、曾祖母が暮らした村を自分の目で見て、自分の足で大地を感じたいです。そのためにも、領土問題という日本とロシアとの間の大きな壁を乗り越えるため、思っていることを声に出し、伝え続けていきたいし、それが大事だと思っています。

それが、四世である私の役割なのです。

【佳作】

## 「北方領土問題について思ったこと」

根室市立歯舞小中学校

3年 桑野 心晴

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からなる日本固有の領土「北方領土」。しかし今、北方領土はロシアに占領されています。

私は北方領土問題に興味があったので、北方領土関連の行事ではいつも授業以上の知識を身につけようとしていました。しかし、小学生の頃の私は「ロシアが悪い！ロシア人が島から出ていけば解決する話ではないか！」という考えの一点張りでした。

私が中学二年生の時、学校で現島民のロシアの人たちと交流する行事が行われました。その行事を通して私は、北方領土は日本固有の領土だけど、今そこで暮らしているのは彼らであり、彼らにとっての故郷は北方領土だということにやっと気が付きました。彼らは私たちと同じ人間です。理解ができない言葉を発しながらいきなり攻撃され、島を追放されたら誰だって恐怖を覚えるでしょう。私はそのような悲しみが連鎖しないためにも問題が一日でも早く解決してほしいと思っています。例えば、日本人とロシア人が一緒に暮らすとします。そうすれば日本がロシアに大金を払わなくても島周辺で漁をすることが可能になり、水産資源が豊かになるでしょう。ロシアは日本が近くなるので物資を輸入したり資源を輸出して、貿易の幅が広がることでしょう。そして何より元島民の人たちが故郷に帰ることができます。

私は曾祖母が元島民であり、自分が島民四世だったということを最近知りました。私は、心から、もう一度曾祖母が故郷へ帰ることができたらいいなと思いました。しかし、曾祖母は故郷に帰ることなくとうの昔に亡くなっています。

終戦から七十四年が経ち、元島民の平均年齢が八十歳を超え、語り手の存在がどんどん少なくなっています。何年も続いている領土問題が簡単に解決しないことも理解しています。だからこそ今、北方領土に一番近い場所で暮らしている私たちが動いていかなければならないと思います。きっかけなど何でもいいのです。私たちが北方領土問題に関心を持ち、声を出し続けていくことが両国が納得する領土問題の解決への一歩になることを願っています。

## 【奨励賞】

### 「北方領土、自由訪問の今後」

札幌市立藤野中学校

2年 宮谷内 勘太

僕は八月二日、「令和元年度第五回自由訪問」に参加しました。僕が上陸したのは国後島の礼文磯、乳呑路、オダイバケの三か所です。そこでは、散策や住居跡を見たり、慰霊碑に行き手を合わせました。ですが、行った場所はどこも住んでいた痕跡はなく、草が生い茂っていました。なので、あまり昔の暮らしがわからず、あまり情報を得られませんでした。三か所の視察を終え、八月五日の十二時頃、下船しました。

ここからが本題です。僕が自由訪問に行き、問題点が見つかりました。それは、情報の少なさです。前までは元島民が多く参加していて、故郷を見て数少ない記憶に浸ったりしていたでしょう。大体の人が島が昔どういった感じだったか、どういう建物があったのか少しはわかっていると思います。なので、場所の説明、ここで何をしていたなどは言わなくてもよかったです。ですが、今は元島民からの参加者は四分の一で、他は僕のような祖父母が元島民だから来ることができる二、三世代です。二、三世代は、初めて自由訪問に来る人が大半で、元島民もどんどん減っている中、三世代が返還要求運動を受け継がなければなりません。ですが、現状として、二、三世代のほとんどがわからないまま歩いています。このままでは、受け継いでも語り手が減る一方です。なので、職員が元島民から話を聞き、現地で説明をするなどの工夫をし、情報を与えるのがよいと思います。船内で話を聞くより、現地で見ながらの説明をした方が想像ができ、わかりやすくなるはずです。これで後継者として受け継ぐことができると思います。多くの人に島のことを話し、二、三世代に頑張ってもらいたいという願いは少しの工夫で多くの人に届くと思います。

僕は、元島民の子、孫として自由訪問に来ていることは、来たくても来られない人がいる中で奇跡だと思います。元島民は積極的に昔の島の様子や自分、親の体験を話す。職員は元島民の話を資料にしたり、上陸をスムーズにする。二、三世代は、元島民の話に身を傾け、情報を取り込み少しでも多く帰ったときに話す。これをするだけで、質の良い自由訪問になるはずです。今のままでは、返還は厳しいと思います。ですが、三世代で力を合わせることで、返還は実現すると信じています。



## 【奨励賞】

### 「強き心と強き意志で前へ！」

登別市立緑陽中学校

2年 堺谷 海斗

「返還しろ返還しろってうるさいなあ」それが、北方領土に関するニュースを見た時に僕が思ったことでした。この時の僕は、北方領土のことを全く知らなかったもので、正直どうでもいいと思っていました。そんな僕は、父に北方領土のことを聞いてみたら、色々教えてくれて、そこでようやく北方領土のことに少し興味がわきました。

僕が最初に面白そうだと思ったのは、資源についてのことでした。択捉島の周りには魚がたくさんいることがわかり、択捉島が返されないことが少し日本の生産業に打撃を与えているのでは？と思いました。

次に興味を持ったのは、北方領土が奪われたのが終戦後すぐのことだということです。せっかく長きにわたった残酷な命の奪い合いが終わって「もう戦いなんてごめんだ」と思った矢先のロシアの襲撃。ロシアの人たちの考えたことなどわかりませんが、おそらくは領土的野心がよほど高かったか、復讐でしょうか。それに対して日本は抵抗しませんでした。僕は政治家ではないので、国家間の問題に口を出すなんてことはしませんが、当時の北方領土に住んでいた住人の方々の気持ちは少し理解できます。僕だったら、絶望してしまうでしょう。

そして、最も興味深いのは、元住民の方やその子孫の方々の諦めない強い心についてです。

何度も何度もロシアと交渉し続け、断られてきたはずなのに、折れずに、いつか返還されるように努力する、前に進んでいける、その逞しい心に僕は感動したのかもしれませんが。少なくとも活動している方々を応援しようと思うぐらいには。僕には、そんな強く逞しい心がないので、とても羨ましく思っています。僕もその強い心を持てたら、今の臆病な自分を変えられるかもしれません。

この作文を書いている、一つのことを気がつきました。それは「悲しみに屈しない心と前へ進んでいこうとする意思」さえあれば、人は大抵のことは上手くやっていけるとことです。

北方領土の返還へ向けて、立ち止まらず、決して折れずに活動を続ける人たちを見て、僕はそう思いました。

宮沢賢治さんの「雨ニモマケズ」。これはとても良い言葉だと思います。コンセプトが少し違いますが、悲しみに屈さず、決して折れない強い心を持つという僕の考えと似ている気がします。

北方領土の返還はまだ達成されていませんが、弛まぬ努力が身を結び、一日も早く北方領土が日本に帰ってくることを、僕も願っています。

## 【奨励賞】

### 「日本に欠かせない北方領土」

登別市立緑陽中学校

2年 中村 斗希

北方領土は、元々日本固有の領土であったが、一九四五年の終戦直後にソビエト連邦に不法に占拠されてしまったのである。そのため、日本は早期返還の実現を目指しているが、戦争をしないと決めている日本では、やはり問題解決は容易なものではないのだ。そんな北方領土は一体どのようなところなのだろうか。そして、問題が起きている中、両国はどのようにして解決のために動いているのだろうか。

北方領土では、様々な産業が豊かである。まず、農業では、北海道で多く取れているが、台風が北海道に何度か来たことにより不足してしまったジャガイモや麦、そばなどを取ることができるのだ。次に、漁業では、今年、漁獲量が格段に落ちたサンマや昆布などの海藻、スケトウダラやホッケなどの魚を捕ることができるのだ。他にも、林業では松などの木が多く、鉱業では採掘鉱区も多く、豊かである。

そんな北方領土には、昔はたくさんの方が住んでいたのだが、ソビエト連邦に占拠されてしまったため、ほとんどの日本人が北方領土から追い出されてしまったのである。そして、ロシア人が住んでいるため、取り返すことは難しいのだ。

しかし、こうして問題が起きている中、共同経済活動も行われている。これは、ロシアのプーチン大統領と安倍晋三首相が会談をして、決められたものである。さらに、北方領土に住んでいるロシア人が北海道の別海町を訪れる交流会も行われている。交流会では、郷土資料館等の視察やホームビジットなど、問題のこころを感じさせないものだった。こうして、両国ともに、問題の平和的解決へ向けての動きが高まっていることがわかる。

このように、不法に占拠されてしまっている北方領土だが、北方領土には、日本が不足している産業が発達しているため、返還は欠かせないものとなっている。だから僕は、一人でも多くの方がこの北方領土の問題と向き合い、北方領土の大切さをみんなに伝えて、国全体で解決へ向けて動いていきたいと思っている。

【奨励賞】

「平和的解決、人々の幸せ」

登別市立緑陽中学校

2年 深谷 いちご

「北方領土」。元々は日本人が住んでいた。一九四五年（昭和二〇年）八月一四日、その日を境に我が国の領土はロシア連邦によって占領されたのだ。

北方領土とは、北海道根室半島の沖合に位置している、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々のことだ。現在、択捉島、国後島、色丹島は約一万六千八百人ものロシア人が生活をしている。そこに住んでいる人たちは、いつ島を追い出されるのか、不安を抱えながら過ごしているのかと思うと、今までは早く日本に北方領土を返してほしいと思っていたが、普通に暮らしている人を追い出すのは、過去にロシアにされたことをやり返すような感じになってしまうだろう。

そこで、私が考えた一番平和に解決できる策は、北方領土は日本に返還してもらうが、領土は日本人もロシア人も住むことができる交流の場にするのがいいと思う。この策には、良い点と悪い点がある。

まず、良い点は、今、島に住んでいるロシア人を追い出すこともないし、国の違いを越えて共に生活することで、いい関係を作れるということだ。

逆に、悪い点は、ロシアにとっては自分たちの領土が日本のものになってしまうということや、日本にとっては元々自分たちの土地だったのに他の国と共有しないといけない、などの点がある。このように、二カ国が十分納得することはないかもしれないが、平等かつ平和に解決する策の一つとして、この策が適していると思う。現在、北方領土に住んでいるロシア人も、昔、北方領土に住んでいた日本人も、すべての人が幸せになれるだろう。

この北方領土問題は、今世界が抱えている大きな問題の一つである。この問題が、早く、平和に解決するために、私たちができること、しなければならないことは、全国民が問題に目を向け、国に声をあげることだと思う。そして、国はその声を聴き、早く解決することが大切だ。この北方領土問題が解決することで、国の問題が少なくなり、よりよい国になることを願いたい。すべての人が、幸せになるための第一歩になれるよう、私たちが国に声を上げたい。一人ひとりの思いが合わされば、より早く国の平和を向上させることができるだろう。

## 【奨励賞】

「どちらが悪い。どちらも悪くない。」

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 清水 優花

「ロシアひどっ」

私が北方領土について学習したときに思ったことである。だって、教科書に「ソ連の解体後も現在に至るまでロシア連邦によって不法に占拠されています。日本政府は、ロシア連邦政府に対して、日本固有の領土である北方領土の返還を求め続けていますが、いまだに実現されていません。」とあるのだから。要約すると「日本の領土なのにロシアが占拠している。お願いしているのに聞いてくれない。」ということだろう。ロシアが悪いようにしか聞こえない。果たして、本当にそうなのだろうか。

北方領土について考えてみた。島全体で約一万七千人の人々が住んでいたそう。ということは、昔ソ連がしたことは、約一万七千人もの人々の未来を奪ったということだ。辛かっただろう。悲しかっただろう。怒っただろう。私が実際住んでいた土地を奪われたわけではないので、想像でしかない。しかし考えてほしい。今、誰かも分からぬ人に突然出ていけと言われて、素直に出ていけるものだろうか？そしてもう一つ考えてほしい。住む人の気持ちはどうなのだろうか。見知らぬ土地に連れてこられ、住めと言われて住めるものだろうか？きっと望んで来たわけではない。その人にも故郷があったはずだ。私も見知らぬ土地にいきなり住めない。ここで最初の疑問に戻る。「ロシアが悪いのだろうか？」の「ロシア」は何を表しているのか。大統領のことだろうか。国民のことだろうか。数分前の私は何を「ロシア」としていたのだろうか。今、私は「ロシア」国民は悪くないのでは？と思っている。しかし、まだ「ロシア」は悪い、ひどいと思っている。そこでもう少し考えてみる。

もし北方領土を返してくれたら？当然元島民は島へ「帰る」だろう。しかしそこに住んでいた人々はどこへ「帰る」のだろうか？北方領土がロシアに不法占拠されて七十四年。その間、そこに住んでいた人にとって北方領土は故郷であり、帰る場所なのだ。その彼らにどこへ帰れと言えればいいのだろうか。島が返されるということは、彼らを追い出すことと同じである。七十四年前と同じ思いを彼らにさせるのだろうか？

ここまで考えてきて、どちらが悪いとか、どちらが悪くないとか、そんなことより大事なことがあるのでは？と私は思う。そんなことを言う時間があるのなら、元島民と現島民の未来を考えてほしい。返さないでほしいわけじゃない。返してほしい。ただ、その先は？ということである。両者を想い、考えた答えを出してほしいと思う。

「日本ひどっ」

と言われたいことを願って。

「共存」という選択肢

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 成田 善昭

「北方領土はどちらのものか」

今、日露間で話し合われていることだ。

僕はつい最近まで、この話し合いに違和感を覚えることはなかったし、日本のものであるのが当たり前だと思っていた。

しかし、社会の授業で「ジョバンニの島」を見て、この話し合いに違和感を覚えるようになり、僕の北方領土問題に対する考えも大きく変わった。

「ジョバンニの島」では、ロシア人の子供と日本人の子供が楽しそうに遊ぶシーンがある。このシーンを見て僕の中に「共存」という考えが生まれた。言語が違って、国が違って、友達になり、一緒に遊ぶことができるのだ。

さらに共存にはいくつかメリットがあると僕は考える。

まず、悲しむ人が減る。北方領土には一万六千人ものロシア人が住んでいる。もし、北方領土が日本に返還されることになったら、現地住民は自分たちの故郷から追い出されることになり、多くの人々が悲しむだろう。また、多くの人々が日本に反感を覚え、日本とロシアとの間の問題となるだろう。

だが、共存とすると、どうなるのだろう。ロシア人も追い出されることもなくて済むし、日本の元島民の方達も自分の故郷に帰ることができる。

今、北方領土は日本人だけでなく、多くの人々の故郷となっている。そういったことも考えた上で、話し合いを進めるべきだと思う。

メリットはこれだけではない。共存は日本やロシアの国の発展に大きく貢献することになるだろう。

互いが互いの文化や価値観に触れることで二国間の文化交流が盛んになり、その交流した文化や価値観等を知ることで、交易が盛んになったり、トラブルが減ったりするだろう。

さらに、共存することによって、ロシア人と日本人の距離が縮まり、ロシア人も日本人も互いの国を身近に感じるようになり、それぞれの国の観光客も増えるだろう。

こういった点から、僕は「共存」という考え方には多くのメリットがあると考える。

だが共存するためには、互いが互いを理解しなければいけない。これまでの歴史などは考えずに、互いが互いの未来を考えて、互いがちょっとずつ我慢し、理解し合おうとすれば、きっと簡単に共存することができるだろう。

日露の二国間では、「共存」という選択肢も頭に置きながら、話し合いを進めるべきだと僕は思う。

## 【奨励賞】

### 「互いに分かり合う」

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 高橋 聖奈子

「北方領土は日本の領土。なのになぜロシア人が住んでいるのだ。おかしい。」初め私はこう思っていた。「私たちの領土を返せ。」きっと日本人の誰もがそう思うはずだ。しかし、あることをきっかけに、「返還を求めるのではなく、和解を求めたい。」そう思うことができたのだ。

私が北方領土について真剣に考え始めたきっかけは、社会の授業だった。テーマは「北方領土をロシア側から返還を求めるか、それとも返還を求めないか。」私はもちろん返還を求める側に挙手した。日本固有の領土がロシア連邦によって不法に占拠されているからだ。逆に返還を求めない側の意見が想像もつかなかった。最初までは。だが、クラスメイトと意見交換をしていくうちに私は自然と「返還を求めない側」の気持ちへと変化していったのだ。返還を求める側の意見は「日本の領土だから。不法に占拠されているのはおかしい。」などの一般的な答えだった。それに対して、返還を求めない側の意見は「ロシア人の今の暮らしを壊してしまうことになる。ロシアの人たちがかわいそうだ。」などのロシア側の目線に立って物事を考えていたのだ。自分の中にはなかった視点であり、すごく心に突き刺さった言葉であった。

でも、そこでまた問題が生じてしまう。「いくらロシアの人たちの生活が大切だと言っても、日本人のことは何も考えずにいいのか。いや、それはだめだ。元々は日本固有の領土である。そこも考えなければいけないのだ。すると意見があがる。「ロシアと日本で共通の法律をつくって、一緒に住めば良いのでは？」だが、また問題が起こる。文化の違いがあるため、法律を同じにしまうと、どちらの法律がよいか、裁判が起きてしまうかもしれない。日本とロシア、一緒に住むと言うことはきっと難しい。日本にとってのメリットがロシアのデメリットになってしまう。ロシアにとってのメリットが日本のデメリットになってしまう。とても難しい問題だと思う。

でも、お互いに分かり合い、助け合い、信じ合うことにより、新たな絆が生まれ、その絆こそがロシアとの和解の大きな一歩につながるのではないかと思う。そして両国が共存し合える社会をいつか創り上げることができるはずだ。

そこで私にできること。それは、友人との会話でこの問題を切り出してみる。北方領土問題について両国が気持ちよく過ごせる方法を考える。そして家族や先生、たくさんの人と交流し合うことにより、最高の解決策、いや、和解の大きな一歩を踏み出せると思う。「誰かがやればいい」ではなく「自分から」発信し、それが世界に伝わり、和解へとつながっていくことを願う。いつの日か両国の人たちが、いいえ、世界の人たちが誇れるような和解になりますように。

## 【奨励賞】

### 「これからの北方領土」

北海道教育大学附属釧路中学校

2年 山崎 光

北方領土。それはいまだに日本に返還されていない日本固有の領土だ。僕が北海道で過ごしている中で、度々耳に入ってくるこの北方領土問題。僕は、このことについて詳しくは知らなかったのですが、北方領土問題について調べて考えてみました。

まず、なぜこんなにも長く問題が続いてしまっているのか。それは、日本が四島返還を目指していることと、ロシアと日本の意見の食い違いが起こってしまっていることにあります。四島返還についてですが、様々な人が四島は難しいと行っており、四島一括返還をこのまま言い続けていると一向にらちがあかないと思います。僕は、四島一括返還ではなく、一島だけ、二島だけでも返還してもらだけでも価値があると思います。仮に、最終的には一島しか返還されなくても、元島民の方には申し訳ないとは思いますが、全然良いと思います。この問題を解決していく上で、このまま踏み止まり続けるより、少しずつでも返還してもらい、解決への道をたどる方が良いと思います。一歩ずつ、ゆっくりでも良い。地道にでも解決していくことに、意味や価値があると僕は思います。

次に、意見の食い違いについてです。例えば、先に住み着いたのは日本だ、ロシアだなどの歴史的権利がどちらの国にあるかがあげられます。僕は、このことについてはよくわかりませんが、正直、昔のことについて争うのはあまり良いことだとは思いません。大事なのは、今とこれからのことについてです。仮に、どちらかが昔のことで正しかったとしても、問題は解決しないと思います。これからロシアとどうありたいか。北方領土は、ロシアと日本両国共にどういう場所でありたいか、もし北方領土が返還されたとして日本はそれをどうしていきたいかなど、これからのことを考えていくうちに、ロシアと意見が合うことがあるかもしれませんし、問題解決に少しずつでも近づいていくと思います。後ろを向かず、前を向き、目の前のことに注目して考えることで新たな気づきが生まれ、この問題を良い方向に引っ張っていけると思います。

最後に、僕は、北方領土をロシアとの関係を友好的に深められる共通の場所にできれば良いと思っています。日本人とロシアの方を北方領土に自由に行き来できるようにし、共に歩いていく。これが僕の理想の北方領土です。難しいことかもしれないけれど、ロシアと日本を繋ぐ共通の領土にしてほしいと思います。もしそうなったとして、他に問題ができてもお互いに分かり合うことができれば大丈夫だと思います。

元島民の方たちのためにも、自分にでも協力できることはしていきたいと思っています。そして、一刻でも早く問題が解決されるよう僕は願っています。

【奨励賞】

「北方領土を返してほしいという思い」

根室市立歯舞小中学校

1年 干場 リコ

今、北方領土はロシアに占領されています。「二島を返す」とは言われていますが、なぜ全ての島を返してくれないのでしょうか。全ての島を返せばそれですむことです。私は、こんなことで争わないでほしいと思っています。人は昔から争いを繰り返して傷つけ合い生きていく、そういう世界ですが、私は争ってほしくない。元島民のためにも。

北方領土がロシアに占拠されて元島民はどう思ったのでしょうか。私の曾祖母は、元島民でした。私の曾祖母はつい最近、亡くなりました。私は曾祖母が活着ている間に北方領土が返ってきてほしかった。住んでいた頃とは風景は違つかもしれないけど、連れて行ってあげたかったと、心の底から悲しい気持ちがあふれてきました。私は、曾祖母のためにも返ってきてほしい。一気に返ってこなくてもいい。少しずつでいいから返ってきてほしい。もし、返ってきたときは、天にいる曾祖母に、「やっと返ってきたよ」と声をかけてあげたい。

「ひいおばあちゃん、もうふるさとに行つたかな。」

「元島民の人たちもふるさとに行けたかな。」

「行けてたらいいな」

と心の底から願っています。

私が島民四世ということもあるし、曾祖母や元島民のことを考えると本当に返ってきてほしい。

私は、将来歯舞から出て行きます。皆さんも将来出て行く人がいるかもしれません。出て行くからと言って

「自分には関係ないや」

と思つたりしないですね。

自分たちのふるさとのためにも、自分たちで北方領土問題を解決しなければいけません。



【奨励賞】

「北方領土問題について」

根室市立歯舞小中学校

3年 清水 空

「歯舞？歯舞ってあの四島の中の志発とかがある所から来たのかい？」

私は、今年地元PR活動中に会った男性にこのような言葉をかけられました。

北方領土問題は解決していないのだから、日本人が四島から来られるわけがないのと思う反面、北方領土の中の島の名前、しかもそれほど有名でもない島を知っているのに、なぜ北方領土問題の現状を知らないのだろうと疑問に思いました。

その時は地図を使って説明しましたが、世の中には島の名前すら知らない人もいるかもしれないのです。いえ、知らない人の方が多いでしょう。

では、どのようにすると、もっと多くの人に北方領土問題を知ってもらえるでしょうか。

例としては、元島民による活動や学校での学習、SNSを通してのPRと様々な意見があるでしょう。

しかし、私はまず解決に向けてどのようにすると良いかを考える過程の方が、解決策よりも大切だと思います。解決策を考えることから、一人ひとりの意識を変えていくことが北方領土問題を解決に導くための大きなカギとなるのではないのでしょうか。

「別に私には関係ない。」

「よくわからないから、やりたい人だけでやればいい。」

そんな投げやりで、マイナスな考えを変えていくことは、北方領土問題に限らず、今この国が抱えている国民全員が考えなければならない問題を良い方向へ向かわせ、より良い日本にしていくために必要なことだと思います。

## 【奨励賞】

### 「北方領土」

根室市立歯舞小中学校

2年 津嶋 明里

いまだ解決されていない北方領土問題。ロシアに不法占拠されている色丹島、択捉島、国後島、歯舞群島。その出来事から日本人には、ロシア人に対してマイナスな考えをもっている人もいる。しかし、私が今まで出会ったロシア人は、日本人にプラスな考えをもっていた。

一回目のビザなし交流で、ロシア人が日本にあるこの学校を訪れた。お互いに互いの国の言葉を話し、遊びやプレゼントを渡し合った。この時の皆の表情は笑っていた。

二回目のビザなし交流で私は、国後島に行ってきた。出迎えに来てくれたロシア人の中には、日本語を少し話すことのできる人もいた。住民の家を訪問した。日本人である私たちを快く歓迎してくれた。訪問先のロシア人はテンションが高く、来て良かったと思わせてくれた。意見交換や、学校見学を通して共通点や、異なる点などを見つけた。でも、ほとんど日本人と同じことがわかった。

交流を終えて、日本人がロシア人を嫌う理由がよりわからなくなった。ロシアのご飯はおいしいし、住民はいい人だ。日本人の墓を修理してくれている人もいるし、日本を好きだと言ってくれる人もいる。私は日本人に今のロシア人を見てほしい。領土を奪われて怒る気持ちも分からなくはない。だからそれで、嫌っていいわけではない。例えば、北方領土が日本に返ったとしよう。すると今、北方領土に住んでいるロシア人を追い出すことになる。日本人を追い出したロシア人のように。私たちが憎むべき相手は住民のロシア人ではない。ロシアのお偉いさんではないのか。憎むべき相手と同じようなことをして日本人の元住民は喜ぶのか。きっと喜ばないだろう。もちろん私もだ。このように誰かを追い出さなければ問題は解決されないのか。そんなことはない。もしも、北方領土が日本やロシアの領土でなかったら。もしも、北方領土が日本とロシアの共同の領土であつたら。誰も追い出されずにすむし、自由に行き来することもできる。固有の領土がそんなに大事なのだろうか。一番大事なのは、皆が納得できる解決策なのではないかと、私は思っている。

今の日本とロシアの関係はまるでアニメやマンガのラブコメだ。ロシアが日本に好意を持って、日本はロシアに敵意を向けている。でもアニメやマンガは必ず距離が縮まる。現実でも、日本とロシアの距離が、少しは発展しますように。



## その他

- ・ 2019年度北方領土中学生作文コンテスト実施要綱
- ・ 2019年度北方領土中学生作文コンテスト選考要領
- ・ 2019年度北方領土中学生作文コンテスト実施結果

## 2019年度北方領土中学生作文コンテスト実施要綱

### 1 趣旨

次代を担う北海道内の中学生が、日本固有の領土「北方領土」についての関心を持ち、理解を深めてもらうため、北方領土に関する作文を募集する。

### 2 主催

北海道

### 3 共催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

### 4 協力

北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道国語教育連盟、北海道社会科教育連盟、独立行政法人北方領土問題対策協会、公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟

### 5 テーマ

北方領土に関することであれば内容は自由

#### 【内容の例示】

- ・北方領土について考えたこと、学習したこと
- ・北方領土に関する行事（ビザなし訪問・受入事業、青少年研修など）に参加した感想
- ・北方領土に関する書物（書籍、手記、北方四島創作絵本など）を読んだ感想
- ・北方領土を舞台にしたアニメ映画「ジョバンニの島」の感想
- ・北方領土出前授業や元島民の語り部を聞いた感想 など

### 6 募集

- (1) 対象 北海道内の中学校に在学している者
- (2) 募集期間 令和元年（2019年）年5月24日（金）から10月31日（木）まで
- (3) 作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚程度
- (4) その他 本文の前に題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入してください。

### 7 審査

主催者において選定した審査員により審査

### 8 表彰等

- (1) 発表 審査結果は、令和2年（2020年）1月中旬までに各応募校の学校長あて通知する。
- (2) 表彰点数 最優秀賞：1点（賞状、副賞：5千円分の図書カード）  
優秀賞：4点（賞状、副賞：3千円分の図書カード）  
佳作：数点（賞状）  
奨励賞：数点（賞状）
- (3) 表彰 北方領土の日（2月7日）を中心とした期間に表彰予定
- (4) その他 入賞作品の中から独立行政法人北方領土問題対策協会が主催する「令和元年度『北方領土に関する』全国スピーチコンテスト」第2次選考への推薦を行う。

### 9 その他

- (1) 応募作品は原則として返却しません。
- (2) 応募作品の著作権は主催者に帰属します。
- (3) 応募作品は今後の北方領土返還運動の啓発などで使用することがあります。また、入賞作品は公表するほか、作品展、ホームページなどで使用することがあります。
- (4) 応募に係る個人情報、北海道が管理し、選考や表彰、啓発事業の実施等に必要な場合にのみ使用します。

#### [作品提出先・お問い合わせ先]

〒060-8588  
北海道札幌市中央区北3条西6丁目  
北海道総務部北方領土対策本部  
TEL 011-204-5069（直通）

## 2019年度北方領土中学生作文コンテスト選考要領

北方領土中学生作文コンテストの応募作品を対象に次のとおり選考を行う。

### 記

#### 1 選考基準

以下の基準をもとに審査し、入賞作品を選考する。

##### (1) 題材

- ・「北方領土に関すること」という主題に合致しているか。

##### (2) 構成、内容

- ・話の組み立てが明快であるか。
- ・表現に豊かな点があるか。
- ・文章の表現や表記が的確であるか。

##### (3) 北方領土問題の理解度

- ・北方領土について正しく認識しているか。
- ・北方領土問題に関心を持っているか。

##### (4) 主張

- ・北方領土問題に関する考えや意見が含まれているか。
- ・読み手に共感を与える内容であるか。

#### 2 選考方法

##### (1) 1次選考

作文評価の専門的知識と実績を有する北海道国語教育連盟の協力を得て、優良な作品を20作品程度選出する。

##### (2) 2次選考

道及び関係機関・団体の代表者各1名により構成する選考会において、1次選考で選出された作品を対象に審査を行い、入賞作品を選考する。

[関係機関・団体]

北海道国語教育連盟、独立行政法人北方領土問題対策協会、  
公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、公益社団法人北方領土復帰期成同盟

#### 3 入選発表

令和2年(2020年)1月中旬を予定

#### 4 表彰

最優秀賞：1点(賞状、副賞：5千円分の図書カード)

優秀賞：4点(賞状、副賞：3千円分の図書カード)

佳作：数点(賞状)

奨励賞：数点(賞状)

#### 5 その他

2次選考において、入賞作品の中から独立行政法人北方領土問題対策協会が主催する「令和元年度『北方領土に関する』全国スピーチコンテスト」第2次選考への推薦作品を選考する。

## 2019年度 北方領土中学生作文コンテストの実施結果

### 1 募集期間

令和元年（2019年）5月24日～10月31日

### 2 応募作品数

184編（15校）

### 3 選考会概要

開催年月日	審査員（作文審査の専門家、北方領土関係団体など5名）	
令和元年（2019年） 12月19日（木）	北海道国語教育連盟事務局次長	大田 利幸
	（札幌市立新琴似中学校校長）	
	（独）北方領土問題対策協会専務理事	山谷 英之
	（公社）北方領土復帰期成同盟参事	甲谷 俊二
	（公社）千島歯舞諸島居住者連盟事業第二課長	安達 博昭
	北海道総務部北方領土対策本部主幹	藤本 雄

### 4 選考結果

賞	学校	学年	氏名	作品名
最優秀賞	中標津町立計根別学園	9	近藤 夏林	返還を世界平和の象徴に
優 秀 賞	北海道教育大学附属札幌 中学校	2	二階堂 桜子	ニエットからズドラーストビチエ へ
	網走市立呼人中学校	2	寺崎 結	北方領土問題について
	北海道教育大学附属釧路 中学校	2	皆添 莉子	北方領土についての根本的な問題
	根室市立歯舞小中学校	3	中村 そら	これからの北方領土
佳 作	5名			
奨 励 賞	11名			

### 5 入賞作品の閲覧

入賞作品は、若い世代を中心に多くの方に読んでいただけるよう道のホームページに掲載

U R L : <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/hrt/sakubun.htm>



第18回（2019年度）「北方領土の日」ポスターコンテスト  
優秀賞（こどもの部 中学生）森谷 音雲さん（北見市）の作品

## 2019年度 北方領土中学生作文コンテスト入賞作品集

令和2年（2020年）3月

編集・発行

北海道総務部北方領土対策本部北方領土対策課

〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目



北方領土のイメージキャラクター  
エトピリカの「エリカちゃん」